

変 若 水

竹 内 金 治 郎

は し が き

本稿は、去年の五月二十三日、東洋女子短期大学で開かれた上代文学会の春季大会において講演したものの筆記をもとにし、幾分手を加えたものである。従つて委曲をつくしていず、不満も多いが、今これを論文形式に改める時間もなく、已むを得ず、編集部の上諾を得て、そのまま載せていただくことにした。大方諸賢のご諒恕にまつ次第である。

只今、司会の柴生田先生のお言葉にもありました通り、今日は私の満七十歳の誕生日に当たります。昔風に言いますと古稀とか申し、古来甚だ稀なケースとして祝つたそうではありますが、近ごろは人間の寿命が大変延びましたので、七十歳の人間などその辺にザラにるので近ザラ、というのだそうでもあります。しかしそれはともかくとして、私としてはやはり一応の感慨なきを得ません。幸いに健康にめぐまれ、いまだかつて病氣らしい病氣一つせず、こうして元氣で今日まで生きてこられたこと事態、非常に仕合せであるうえに、母校日大をはじめ、当上代文学会はもちろん各種の学会において、多くのよき先輩や同僚にめぐまれ、常に温かいご指導やご援助を得ることのできましたことは、私にとってこの上ない幸福であつたと存じます。私は今、心からなる感謝の念を禁ずることができません。ここに厚くおん礼申上げる次第でございます。今後、私に残された余命はいくばくもないことは存じますが、この生命のあの限り、母校のため、学会のため、誠心誠意努力いたしたいと考へておりますので、今後ともよろしくお願いいたし

ます。

前置きはこのくらいにして、本論にはいることにいたしました。

一見、おかしな標題を掲げましたが、これをどう読むか、またどういう意味に解するかにつきましては、いずれ後ほど詳しくお話すことにして、まず順序として人間の生命——つまりいのちというものに対し、万葉人が果してどのように考えていたか、いわば万葉人の生命観、とでもいうべきものについて一応考えてみようと思います。

集中を通して、いのちという語をもった歌が少なくとも七十八首ほどございます。単独でいのちといった例もありますが、たいていは上に何等かの修飾句をもっております。たとえば、

命あらば逢ふこともあらむわが故にはだな思ひそ命だに経ば(15三七四五)

かくのみし恋ひや渡らむたまきはる命も知らず歳は経につつ(11二二七四)

う、つせみの命を惜しみ波にぬれ伊良虞の島の玉藻刈り食む(一二四)

初めの歌は、単独使用の例ですが、あとの二首はいわゆる枕詞によって修飾された例であります。一体、枕詞といものは、後には形式化し固定化して、どうしてその語にかかったものか、意味や関係が判らなくなってしまうものも相当ありますが、発生当初は然るべき意味をもって、次下の語にかかっていたものと思われます。早い語がこのたまきはるですが、これは命にかかるとしてすこぶる有名でして、集中に十四回も使われておりますが、その初めの意味が忘れられてしまつて、いろいろ説はありますが、はっきりしたことは判りません。う、つせみの、は二回ほどしか使われておりませんが、これとてもはっきりした意味は判らないのが実情です。こうした化石化した枕詞とは別に、作者がはっきりした実感として思つていたと思われる、命に対する修飾語もいくつかあります。たとえばこんなのがあります。

梓繩の長き命を欲りしくは絶えずて人を見まく欲れこそ(4七〇四)

君に逢はず久しくなりぬ玉の緒の長き命も惜しけくもなし(12三〇八二)

このように梓繩のとか、玉の緒のとかいう枕詞を冠して「長き命」と歌った歌が三首ほどあります。梓繩や玉の緒は長いものであるから、すぐ下の長きにかかった枕詞で、命とは直接関係はありません。これらはいずれも恋の歌でし

て、たえず君と逢うために長き命が欲しいとか、どうせ逢えないなら長き命もいらなにかい内容のものでして、正常な心理状態で命が長いと観じたものではなさそうです。そこでこれらは例外として省くことにいたしました。すると、命は短いとか脆いとか消え易いとかいった例が非常に多いようでございます。たとえば、

かくしつあらくを好みぞたまきはる短き命を長く欲りする(6九七五)
水泡なすもろき命も梓繩の千尋にもがと願ひ暮しつ(5九〇二)

朝霜の消やすき命誰がためと千年もがもとわが念はなくに(7一三七五)

これらの外にも、たとえば露の命(17三九三三)仮なる命(11二七五六)たゆたふ命(17三八九六)留め得ぬ命(3四六一)数にもあらぬ命(4六七二)夕べをも知らざる命(11二四〇六)いくばくも生けらじ命(12二九〇五)など、いのちに冠した修飾語はいろいろな形で出ていますが、通観していえることは、万葉人が生命に対して持っていた感情は、短く、脆く、はかないものというところになるかと存じます。

ところでここに興味深い一首がございます。それは卷十一に出る作者不明の歌ですが、

ちはやぶる神の持たせる命をば誰がためにかも長く欲りせむ(11二四二六)

というのであります。われわれの命は神様もっている、つまり神によって左右されるものであって、長くも、短かくも人間の力ではどうにもならないという考え方で、これは中国思想の天命、天寿にも通ずるもので、結局、運命論に落ちつくわけでありましょう。勿論、現在でもこうした生命観はわれわれの一部にもまだ生きていることは皆様ご存知の通りであります。

さて次には、命という語を主語として、下に続く述語を調べてみますと、そこにも万葉人の生命観のようなるものがあることが知ることができます。たとえば、

かくのみし恋ひし渡ればたまきはる命もわれは惜しけくもなし(9一七六九)

何せむに命をもとな永く欲りせむ 生けりともわが念ふ妹に易く逢はなくに(11二三五八)

こういうのは、命が惜しくない、命がいらないうのであります。これも前に申しましたように、作者は目下、恋愛に陶醉しているのでありまして、正常な心理状態ではないのであります。もしかすると、これは作者の本心では

なく、単なる歌の上での技巧か、然らずんば相手を射とめんとするジェスチャーであつたかも知れません。事実、前歌の作者抜気大首などは、太宰府の役人として九州に在任中、こんな歌をいくつか作つて、とうとう豊前の国の美人として名高かつた紐の児という女性をマンマと手に入れたということでありませぬ。

それはさておき、人間としてやっぱり生命は惜しいものであり、健康で、仕合せであるならば、一日でも二日でも、いや百年でも千年でも長生きをしたいというのが人情ではないでしょうか。万葉人にもこの生命に対する愛惜感、を歌つたものが多々あります。節の間も惜しき命(19四二二)というように修飾語として前置した例もありますが、次のように命が惜しいとはっきり述べた歌もあります。たとえば前にも述べた麻績王の

うつせみの命を惜しみ波にぬれ伊良良虞の島の玉藻刈り食む(1二四)
にしても、大伴家持が越中国で作つた

……たまきはる命惜しけど 為むすべのたどきを知らに 籠り居て念ひ嘆かひ……(17三九六九)
にしても、みなそうであります。短かく、はかない命であればあるほど、長かれかしと願うのが人情でありまして、前に掲げた歌にも「千尋にもが」とか「千年もがも」となどありました。次の歌などもだいたいそれと同想かと存じます。

うつせみの命を長くありこそと留れるわれは齋ひて待たむ(13三二九二)
わが命も常にあらぬか昔見し象の小川を行きて見むため(3三三二)

「常にあらぬか」は「常にあれかし」と同意で願望の意であります。常とは恒常、すなわちいつも変らない、一定不変の状態をいうのであります。しかし現実には、この世の中には常という状態はないといわれています。常が無い、すなわち無常というのが人生の真相だとされています。われわれ人間をも含めて、この世にありとあらゆるものが、時々刻々に変化し、推移しつづつあるのが実情であります。

こんなことをいっているうちに時間がたつて、残り少なくなりましたが、これから大急ぎで標題の「変若水」には入りましょう。これをヲチミヅとよむのですが、万葉の原文には必ずしもこうは書いてなく「越水」(13三二四五)「変

水」(4六二七、六二八)と書いてあります。越をヲチとよむのはこの字の音を借りたものであり、変をヲチとよむのは、変若の下を略したものと思われまゝ。大体この語は、語の構成上からいいまゝと、動詞の連用形の体言化したものに水がついて熟語をなしたものと思ひます。そうとすれば当然ヲチという動詞があつたことになりまゝですが、そのことは次のようないくつかの用例によつて実証することができます。

わが盛りいたくくだちぬ雲に飛ぶ葉はむともまた遠知ぬやも(5八四七)

雲に飛ぶ葉はむよは都見ばいやしきあが身また越知ぬべし(5八四八)

共に大伴旅人の九州における作歌であります。この用字法は明らかに字音を使つた、いわゆる万葉仮名でヲチとしかよめません。しかも初めの場合はメに接していますから未然形、次のは又に接してきますから連用形ということが判ります。するとこの動詞はタ行上二段活用の動詞であつたことも判ります。従つてヲチミヅは、その連用形のヲチが体言化し、下の水に熟してできたものと思われまゝ。これでこの語の訓法や語構成が判つたわけでありまゝですが、それではヲツという動詞の意味はどうかといひまゝと、さきほど挙げた大伴旅人がもう一首次のような歌を詠んでゐるところから大体想像がつきそうです。

わが盛りまた変若めやもほとほとに奈良の都を見ずかなりなむ(3三三二)

この場合の用字法は明らかに義訓で、用字そのものがヲツという動詞の意義をさしているものと思ひます。すなわち若きに変る、つまり若返る、ということになるうかと存じます。そして万葉の他の歌人の歌を調べてみますと、やはり同じように書いた例がいくつか発見できます。たとへば、

古ゆ人の言ひける老人の変若つとふ水ぞ名に負ふ滝の瀬(6一〇三四)

これは大伴宿禰東人が元正天皇の同伴をして、美濃国の多芸の行宮に行つた時詠んだ歌とされておゝり、詳しくは続日本紀に出ております。それによると、この滝に浴すると、白髪も黒くなり、脱け毛も生え、見えない目も見えるようになり、その他万病に効験があると書いてあります。まことに結構な滝があつたものであります。この場合のヲツはいうまでもなく終止形であります。

吾妹子は常世の国に住みけらし昔見しより変若ちましにけり(4六五〇)

これは大伴宿禰三依が、しばらく別れていたある女性に久しぶりで逢った時の歌で、多分にお世辞がはいっているようです。ここで常世の国がでてきますが、これはこの現実世界とは別に、古代人によって空想的にえがかれた不老不死の理想国で、そこでは絶対に年をとることがなく、むしろ若返るとさえ思われていたのであります。浦島伝説において、主人公の浦島の行った国でもあります。次の歌をみましょう。

石綱のまた変若反青丹よし奈良の都をまたも見むかも（六一〇四六）

ここでは変若反と書いてヲチカヘリとよませております。ヲチですでに若返る意ですから、ヲチカヘリではダブツタような言い方になります。当時こういう言い方もあったとみえ、卷十一にも

朝露の消やすきわが身老いぬともまた若反君をし待たむ（一一二六八九）

とあります。この歌の異伝歌が卷十二にも出ており、それには初句が露霜のとなっており、やはり若反と書いてあります。これだとワカガヘリとよんでもよさそうですが、それでは余りに現代的過ぎるので、やはりヲチカヘリとよむべきでしょう。この語はその語感や語義が後代の人々にも迎えられるらしく、夫木抄、拾遺集、新勅撰集、源氏物語など、その後の歌文にもしばしば使われているようです。

そういうわけで、万葉集には変若水と書いた例はありませんが、私が勝手にこのように書いてヲチミヅとよんだのであります。この点ご了承のほど願います。

次に、果して変若水というようなのがこの世にあったでしょうか。さきほどあげた大伴三依の歌に、「あなたは常世の国に住んでおられたので、だいぶ若返りましたね」とありましたから、常世の国にはあると信じられていたようです。また卷十三には次のようにあります。

天橋も長くもがも 高山も高くもがも 月読の持てる越水 い取り来て 君に奉りて越得しむもの（13三三四五）

作者未詳の古歌であります。これによると月読すなわち月神が変若水を持っているから、高いはしごをかけるか、高い山に登るかして、そこから月の世界に移り、変若水を取ってきてあなたに飲ませて、もう少し若返らせたいものだといっております。中国の史書（後漢書・天文志）に、昔、嫦娥という女が若返りの仙薬を盗んで月の世界へ逃げこんだという伝説があるところから、このように信じられたのでありましょう。しかし、果して月の中にこの水があ

るならば、こんどのアポロの飛行士たちも、つまらない石などよりも、この水でも汲んできた方が、どれだけ人助けになるか判りませんが、そういう話ほとんど聞いておりません。やっぱり無かつたのでしよう。ところが万葉には、なんと地上でこの水を求め歩いた物好きな男があります。それは佐伯宿禰赤麿という男です。ある娘子が赤麿に次のような歌を贈りました。

わが袂まかむと思はむ大夫は変水求め白髪生ひにたり(4六二七)

この歌の意味は「私と結婚したいなら、そんな白髪頭ぢやダメぢやないの、変若水でも飲んで、もつと若返っていらつしやいよ」というのです。すると赤麿も負けてはいず

白髪生ふることは思はず変水はかにもかくにも求めて行かむ(4六二八)

これは「少々白髪の生えたことなど、あんまり気にしないが、そういう有難い水があるなら、何とかして探し求めて、せいぜい若返ってあなたのところに行きましょう」という意味の歌です。かれは一体どこをどう探し廻つたでしょう。そして果して手に入れたでしょうか。勿論これは、二人ともないことを承知の上で、からかい半分に贈答したもので、いわゆる諧謔歌というものでしょう。とにかく変若水をよんだ歌は、集中にこの三首があるだけです。

もう時間にもなりましたので、このへんで私のお話を終ろうと思いますが、結局、変若水なんてものは、この世にも、月の世界にも常世の国にもないということにきまつたようです。とにかくわれわれは、ほかから何かを求めて、それによって若返るということは絶対にできないわけです。ただ、できることは、自分自身のうちに變若水にも代るべき、ある種の靈水を求めて、それによって若返るよりほかありません。それには何か自分の一生をささげて悔いのないような仕事なり研究なりをもって、絶えずそれに向つて精進努力することだと存じます。早い話が、わが上代文学会の会長さんの高木先生や、副会長さんの久松先生などよい例です。こういう先生方は、ご自身の中に絶えずコンコンと變若水が湧き出しておられるので、いつも清新な学問的情熱をもたれ、そういう面ではほとんど老いるということをご存知ないようです。私も今日から七十歳ですが、そんな年寄じみたことをいってはいないで、こういう偉い先生方を見做つて、今後大いに勉強したいと存じますので、よろしくご指導のほどをお願いして、私のお話を終ります。

ご清聴有難うございました。